

# 東 北 大 学

## 実 施 報 告

### (1) 実施責任者報告

東北大学教育学部長 田 原 音 和  
( 教育学部附属大学教育開放センター長 )

#### 1. 放送公開講座の大学における位置づけと放送局その他の関係機関との協力関係について

「放送による東北大学開放講座」は、東北大学の教育学部に附属する大学教育開放センターが、大学教育の社会的開放という基本的使命にもとづき、学内各部局の協力を得て企画・実施するという形でおこなわれている。ただし、この講座の企画にあたっては、本センターの「運営委員会」(教育学部をのぞく9学部と教養部からそれぞれ代表として委員が1名ずつであるほか、本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長の教育学部スタッフで構成)でテーマ、担当講師等を慎重に審議し、全学の意向が十二分に反映されるように配慮されている。また、講座の運営、実施の主力となるのが「大学教育開放センター会議」(本センターの専任教官、兼任教官、教育学部事務長、庶務、教務、会計掛長で構成)で、講座の細目の審議、決定、そして実施にあたる。加えて、本「放送による東北大学開放講座」のために、教育学部に、以下の委員会が特別に設けられ、円滑な講座実施がはかられている。1) 講座実施委員会(本センターの専任教官、兼任教官、それに講座出演全講師で構成) 2) 総務委員会(企画・運営・調査・広報・渉外・庶務担当) 3) テキスト委員会(印刷・校正等担当) 4) スクリーニング委員会 5) 理解度調査委員会

また、番組制作にあたる放送局との関係については、講座を企画・編成するにあたって、「企画段階から制作者の参加を」という放送局スタッフの要望を十分に考慮にいれ、テーマを設定する段階から、大学と放送局とのあいだで意見を交換しあい、議論を深めながら、企画・編成をすすめた。

さらに、本開放講座を実施するにあたっては、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会から「後援」を受け、広報活動などで便宜を払ってもらう一方、昨年度にひきつづき、仙台市博物館の協力をうけ、館内の一劃で「再視聴センター」を開設する便宜をはかってもらった。

加えて、県内各市町村からは、適宜、市(町村)政だより等での講座開設報知、そしてポスターの掲示等で協力をうけている。

#### 2. テーマの選定とそのねらいについて

テレビ講座「結晶：その生いたちと個性 ～生物から無生物まで～」

さまざまな場面で人間の生活とも深いかわりのある結晶をとりあげて、「結晶：その生いたちと個性 ～生物から無生物まで～」をテーマとした。

結晶についての研究の歴史をたどりながら、結晶の成長のメカニズムや結晶の形・性質についての理解をめざすとともに、身近な場面での結晶について検討して、生命活動と結晶とのかかわりなどを考えることをねらいとした。

ラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」

昨年度のテレビ講座では、宮城県の近代経済史をテーマとしたが、今回は現代の日本経済の問題をとりあげて「経済大国日本の虚像と実像」をテーマとした。

戦後の高度成長から現在までの日本経済の歩みを辿りながら、産業構造、地域開発といった、生活を取りまく大きな問題から日常の生活実態にいたるまでのさまざまな問題を再検討して、「経済大国」日本の実像をさぐることをねらいとした。

### 3. 番組、印刷教材、学習指導の関連づけについて

「放送による東北大学開放講座」は、放送番組（講義）と印刷教材（テキスト）とスクーリングを3本の柱として開設されている。したがって、本講座を編成するにあたっては、それぞれの講座の基本構想をしっかりと練り各講師の共通理解を深めることはいうまでもないが、それぞれの柱（放送番組と印刷教材とスクーリング）のもつ特性を十分に考慮し、そのうえにたって、講座の企画・構成がすすめられた。そのさい、とくに留意されたのは、以下の点である。

1) 「講義目的の明確化」 2) 「講義内容の一貫性」 3) 「一定の教育水準」 4) 開放講座としての性格を強くうちだすために、テーマを設定するにあたっては、一般市民の多様な関心を配慮する。 5) これまで本センターが実施してきた「放送講座」が掲げてきた主題のより一層の展開といった点も考慮する。

また、印刷教材を作成するにあたっては、以下の点をとくに考慮した。1) 平明な叙述と独立した読みものとしての一貫性をもたせること。2) 放送内容との相即性は必要であるが、完全な一致は求めない。3) テレビ講座の場合、放送に用いた図表等はできるだけテキストに収録する。4) ラジオ講座の場合、電波メディアにのらない図や表、絵や写真などはできるだけテキストに収録して、受講生の学習に資するように配慮する。

本講座は、放送メディアを活用した講座であるが、受講生がこのような講座で学習しようとする、どうしても講師や仲間同士のコミュニケーションの機会が乏しくならざるをえないということがある。したがって、本講座ではこのような特殊事情を考慮して、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施している。スクーリングは、受講生の数が多いため、あらかじめ本センター宛、郵送によって質問をよせてもらい、それに対する回答を含めた講師の補足説明、さらに会場での質疑応答といった形でおこなわれ、例年、受講生から好評を博している。

### 4. 番組の学習効果について（講師の印象、受講生の反応等から）

本センターは、この放送講座を開設するにあたり、受講生の講座受講によって生ずる教授・学習効果を検討するため、例年、質問紙形式の理解度調査をおこなっているが、本年度もこれを実施し

た。ただし、この結果については、現在、調査票回収、集計処理作業中なので、その詳細はいずれ日を改めてということにしたい。

一般的に、本年度の受講生は、きわめて熱心で、スクーリング会場で、講師の先生方の懇切丁寧な受け応えもあり、時間が不足する場面もかなりあった。とくにテレビ講座「結晶：その生いたちと個性」では、かなり専門的な内容の質問があいつぎ、またラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」では、掲げたテーマがテーマただだけに、スクーリングに先立って受講生からよせられる質問の数が例年になく多く、会場では、この、前もってよせられる質問への対応で手一杯ということもあった。

5. 印刷教材の作成過程について

例年のことではあるが、「放送による東北大学開放講座」は単年度事業であり、この放送講座を担当する講師の先生方にとって、番組出演もさることながら、テキストの執筆、校正が、時間的制約のなかで、たいへん厄介な仕事である。講師の先生方にはテキストの執筆要項を配布し、それにしたがって、原稿の執筆と初校をお願いし、原稿割り付け、再校、再々校、装丁、印刷、製本などについては「テキスト委員会」が担当した。

6. 学習指導の実施状況について

本講座では、前述したように、受講生の学習効果の向上に資するためにスクーリングを実施しているが、その概要は以下のとおりである。

- ◇方法 1) 郵送による質問への回答を含めた講師の補足説明  
2) 会場での質疑応答

◇日時・場所

回	月 日 (曜)	時 間	会 場
開講式 第1回	9月26日(土)	ラジオ・テレビ 14:00~16:00	東北大学 経済学部
第2回	11月15日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学 文学部 "
第3回	12月 6日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学 文学部 "
第4回	12月20日(日)	ラジオ10:00~12:00 テレビ10:00~12:00	東北大学 教育学部 東北大学 文学部
閉講式	12月20日(日)	ラジオ・テレビ 12:00~12:30	東北大学 教育学部

◇出席者数

講 座	受講生総数	9月26日	11月15日	12月6日	12月20日
ラジオ	220(100)	92(41.8)	66(30.0)	49(22.3)	64(29.1)
テレビ	108(100)	50(46.3)	44(40.7)	27(25.0)	36(33.3)
計	328(100)	142(43.3)	110(33.5)	76(23.2)	100(30.5)

〈参考〉再視聴センター利用状況

講 座	実施回数	延べ人数	1回平均	仙台市博物館延べ人数
ラ ジ オ	10回	14人	1.4人	23人
テ レ ビ	11回	11人	1.0人	23人

7. 「大学教育の地域社会への開放」に果たす役割について

東北大学の教育学部に附属施設として「大学教育開放センター」が設置されたのは昭和48年のことである。大学教育の社会的開放にかんする研究と事業活動をおこなうことがその設立の趣旨であり、この種の施設が、わが国の国立大学におかれたのは、これがはじめてであった。本センターは、大学教育開放活動が大学の重要な働きの1つでなければならないという認識にたつて、この面で世界の先進諸国に遅れをとっているわが国の現状を多方面から検討し、大学教育を一般社会に開放していくにあたってのさまざまな問題を、みずから開放事業を企画・実施するという実地の経験を通して研究・解明していくことを任務として発足したのである。したがってセンターの主要な活動は、研究活動と事業活動の2つに大別できるが、昭和51年度からはじまった「放送による東北大学開放講座」は、本センターの事業活動のなかに「特別事業」として明確に位置づけられ、すでに10年以上を経過して、本センターの看板事業として地域社会にすっかり定着している。本センターは、この「特別事業」のほかにも、「主催事業」「共催事業」「受託事業」など数多くの大学開放講座もおこなっているが、まだまだ地域社会全体のなかで量的にみれば大海に投じられた一石にも等しいものである。そのなかで本「放送による東北大学開放講座」は、放送メディアの利用ということから、毎回放送時には数万人の視聴者を数える（視聴率調査）ということから、本センターとしては、大学教育開放の主旨をもっとも活かせる講座として大いに注目し、大いに期待し、またよりよいあり方を目ざして毎年度、さまざまな工夫をこらし、努力を重ねてきた。これまでの成果がそれであるが、大学と地域社会とを結びつけるパイプ役として、その真価が問われるのはまさにこれからであり、これまで以上に内容の充実した放送講座を企画、実施していくにはどうしたらよいか、それが本センターの課題であることはいままでもない。

## 8. 「大学の授業への活用」の状況と今後の可能性について

大学教育開放センターが、これまで実施してきた放送講座のなかで、昭和52年度開設の「地域の科学」は、本学の教養部、それに在仙の私立女子短期大学の社会学の授業の一部として、昭和54年度開設の「地震災害と市民生活」は、本学の教養部の正規の授業の一環として、また同年開設の「がん制圧をめざして」と昭和56年度開設の「生命をひもとく」は、本学に併設されている医療短期大学の授業の一環として、さらに、昨年度開設の「人と国家と社会と ～宮城経済近代化のダイナミクス～」は宮城教育大学の授業に利用されたが（いずれもテレビ講座）、本年度開設の放送講座については「大学の授業への活用」の計画はとくにない。ただし放送講座の「大学の授業への活用」は、掲げたテーマの性格にもよろうが、その可能性は大いに検討されてしかるべきと考えている。

## 9. 実施上の問題点と今後の課題等について

昭和62年度に実施した「放送による東北大学開放講座」をふりかえって、今回の講座開設にあたって、浮かびあがった問題点、特記事項のいくつかを摘記してみたい。

- 1) 本年度のテレビ講座は、「結晶：その生いたちと個性」というタイトルを掲げ、3年ぶりに自然科学系のテーマとなった。本センターの「放送による東北大学開放講座」は、59年度以前は、例年3～4講座を開設し、少なくともテレビは2講座開設が通常であり、そのうち1講座は必ず自然科学系のテーマを掲げることを旨としてきた。しかし、60年度から、講座開設大学の増加にともない、テレビ1講座、ラジオ1講座の2講座開設体制となって以来、一昨年度が「日本史のなかの宮城」、昨年度が「人と国家と社会と ～宮城経済近代化のダイナミクス～」と、テレビ講座は文科系の、それも歴史にかんする講座が2年にわたってつづいた。今回掲げた「結晶」というテーマは、現代社会のさまざまな分野における技術革新のうねりに直接、間接にかかわる重要なテーマであることはいままでもないが、また扱う題材からして、まったくテレビ向きのテーマ、あるいはテレビでしか扱えないテーマといってもよいもので、テレビというメディアを積極的に生かそうとする企画であった。
- 2) ラジオ講座は、「経済大国日本の虚像と実像」というタイトルで、戦後日本の経済の実態に迫ろうとする、「経済学」の講座として企画された。折りから、極めて変動が激しく、先行き不透明な経済情勢を横目に、講座の企画編成がすすみ、またテキスト作成、講義の録音作業がすすんだが、放送日程とのからみで、講義に、どうアプットゥデートな話題を盛り込むかが、苦勞の種であった。くしくも、ラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」の放送開始日の翌々日、ニューヨーク株式市場で株価の大暴落が起こった。また、最終回の「これからの日本経済」のスタジオ録音は、12月20日の放送日の直前まで引きのばされた。今回の企画は、決して時事解説番組ではなく、「経済学」の講座であるが、変転きわまりない、いきものの経済を前に、慎重な対応をよぎなくされたからである。
- 3) 本年度の受講生数は、テレビ講座「結晶：その生いたちと個性」が、かなり専門性の高い自然

科学系の講座であったにもかかわらず、108名と定員をこえた。また、ラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」には時節がら今日的な興味関心もあってか、220名という受講生があつまった。

- 4) 本年度の講座の、テレビ講座「結晶：その生いたちと個性」は、主任講師の砂川教授がテキスト執筆も、また13回の番組出演（番組の12、13回には、小松、塚本講師、また学外からのゲストの先生方を招へいしたが）も、ほぼひとりで担当するという、文字どおりのワンマン形式で開設された。またラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」は、主任講師の吉田教授を中心に、息のあった4人の講師が担当したが、企画の段階から何度も会議をかさね、講座編成案を練り上げていった経緯からして、現代日本社会の経済情勢を理解するための、きわめて密度の濃い内容を、わかりやすく、かつバランスよいかたちで、講座としてまとめあげることができたといっただろう。したがって、ワンマン形式のテレビ講座「結晶：その生いたちと個性」は当然として、ラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」についても、「講義目的の明確化」「講義内容の一貫性」「一定の教育水準」を十二分にはかることができ、講座全体に一貫した流れをつくることができたといっただい。
- 5) 本年度の講座開設にあたり、受講生の登録事務パソコンを使用し、受講生に対する郵送事務などを省力化するとともに、受講生の属性、受講状況などの把握に活用し、講座運営に役立てることができた。
- 6) 例年のことではあるが、出演講師の側からすれば、準備期間の短いことが問題である。担当講師は、講座全体をふまえて、数ヶ月のうちに、講義、番組の構想を練り、企画会議への出席、放送局スタッフとの打ち合わせに従事する。このような超過密スケジュールのなかで、取材活動、テキスト原稿執筆、スタジオ録音、録画をこなしていくということになるが、これは相当過重な日程であった。とりわけ、本年度、テレビ講座を担当した砂川教授は、海外出張のあいまをぬって、テキスト原稿執筆も、スタジオ録画も、ほとんどひとりで精力的にこなしていったが、この大変なご苦勞をものともせず、むしろ愉しんでいるようにもお見うけできた。まったく敬服の至極である。

## (2) 科目担当主任講師の所見

(テレビ科目) 結晶：その生いたちと個性 ～生物から無生物まで～

主任講師： 理学部教授 砂川一郎

結晶という、一般の人には余りなじみがなく、むしろ拒否感を抱かせる存在をとりあげて、13回にわたるテレビによる開放講座を開き、しかも平均視聴率2.3%をあげることができたのは、多分前例がないことであろう。13回全部に私が出演し、うち11回は独演したのも、あまり前例のないことかもしれない。それにはそれなりの理由がある。開放講座を依頼されたのがかなり時間的に余裕が

ない時期で、多くの方に分担依頼するよりも、一人でひきうけてしまった方が楽だという意識が働いたことが一つの理由であり、独演することによって雰囲気統一してしまえと思ったことが他の理由である。結果は悪くはなかったと思っている。もっともそれだけ制作者側に余分のロードをかけることになった。

この講座は、無機・有機、生物・無生物、地球内・地球外にかかわらず、我々の生活にとって結晶がいかに身近で重要な存在であり、たとえ小さな石にも、それぞれの歴史と個性があることを、多くの人に理解してもらいたいという意図で構成した。最初の3回で結晶に関する認識の歴史をたどることによって、結晶とはどのような存在であるかを説明し、4回目で我々の生活の中にある結晶を浮きぼりにして、いかに結晶と我々の日常生活が深いかわりをもっているかを示した。5回目は格子欠陥の話が中心で、現実の結晶はさまざまな、理想状態からのずれをふくんでおり、それが生いたちと深くむすびついていることを説明した。6回から11回までは、ケオス状態の気相や溶液相の中から規則正しい骨組みをもつ結晶がどのように生まれてき、その生いたちの過程で、個性がどのように生まれるかの説明についやした回で、顕微鏡写真やビデオで実際に結晶が成長する様子を示して関心を呼んだ。11回までが私の独演で、12回、13回は新進の研究者との座談の形で、これからの課題である生命活動と結晶、宇宙と結晶を議論した。

トピックがかなりむずかしかったためか、スクーリングでは、最初から文書で提示された質問はなかった。しかし、復習の形で説明すると、次々に興味深い質問が返ってきて、スクーリングの時がたつのも忘れるほどであった。多分、課題を完全には理解しないまでも関心を深めてくれたことは間違いなさそうで、多忙な時間を割いて開放講座を行なった意義は十分あったと私は感じている。ご協力いただいた方々に深く感謝したい。

(ラジオ科目) 経済大国日本の虚像と実像

主任講師： 経済学部教授 吉田 震太郎

本講座は、現在日本経済が抱えている主要な問題を、できるだけ網羅的・系統的に解説する試みである。このような企画は、多くの人々の関心をひくにちがいないが、一面、次のような点に留意しなければならない。第1に、聴取者に単なる時事解説を複数回行うのではなく、できるだけ広い視野に立った時代認識をあたえなければならない。第2に、そのためには、学問的研究をふまえた専門家集団の十分な意志疎通が必要なのである。

本講座は、まことに幸いなことに、第一線の研究者が事前に十分に打合せをし、また講義を行うことができた。13回の講義は最初と最後を講師たちの座談会にあてたが、大変息の合った座談会になったと思う。残りの11回の各講師の講義も、途中で主題に関係する巷の声の録音を入れたり、またある場合には、聴取者代表に質問をさせる形を取入れたり、それぞれに工夫をして、成果をあげたと思う。

とくに熱っぽい質疑に時間が足りない思いがしたのはスクーリングであった。身近な問題であった

故もあろうが、参加者たちの真剣な問いかけは、講師自身にも大層勉強になった。

しかし一番問題を感じたのは、テキストのあり方であった。テキストの原稿の締切りが放送の約半年前であり、事実経過としてもこの間に株式暴落があったりするなど、放送の内容はテキストと一応別にならざるをえなかった。もともとラジオの場合は、数表を放送に用いたりはできないのだし、どういう意味合いでテキストが必要なのかを再考してみる必要があるように思える。スクーリングの時に、テキストの文言に対する質問が多かったこともあり、聴取者はテキストに頼る面もあるのだから、この点は重要だと思う。

12月20日に最後の放送を終わったが、筆者は聴取者から年賀状や手紙を何通も頂いた。大変光栄に思っている。



## 制 作 報 告

### (1) 制作責任者報告

東北放送報道局次長 渡 辺 生 児

( 東北大学開放講座制作総合プロデューサー )

#### 1. 番組制作の基本方針と大学その他の関係機関との協力関係について

東北大学開放講座制作の基本方針は、「大学における研究・教育の成果を地域社会に開放することと「地域文化の向上に資し、併せて地域住民の生涯教育の機会を充実し、放送によって地域社会と大学とを結ぼうとする」という目的を実現するために、以下の四つの柱をたて、従来から実施してきた。

- 1) テーマの決定と各回の内容構成決定に至る過程を重視する。
- 2) 主任講師、担当講師、制作総合プロデューサー、制作担当ディレクター等の担当者の「発酵過程」を重視し、十二分にその時間をとるようにする。
- 3) レベルを下げないで、親しみ易く、わかり易く、おもしろい番組にする。
- 4) ラジオ、テレビの特性を利用した教材を多用する。

この制作方針を実現するために、東北大学と東北放送との間で、講座の当該年度の1年以上前から、テーマ、講座の構成の打ち合わせを行っている。また、制作に際しては、当該講座のテーマにかかわりを持つ諸機関、民間企業、個人の強力な協力を得よう努めている。昭和62年度に実施したラジオ講座「経済大国日本の虚像と実像」、テレビ講座「結晶：その生いたちと個性～生物から無生物まで～」の企画は、昭和60年秋から各講座の主任講師との間で検討をはじめ、昭和61年末にその構成概要を決定し、昭和62年3月から制作に着手し、全国宝石協会、宝石博物館をはじめとして、民間企業、金融機関、科学映画制作プロダクション、個人等の絶大な協力を早くから得て制作を完成し得たのは、その好例である。

#### 2. 番組の企画、構成及び制作上の工夫、特色等について

##### (1) 番組の企画ならびに構成について

- 1) 東北大学開放講座を企画するに当たっての基本となる六つの柱に沿って、大学と放送局双方から、当該年度の1年以上前からテーマ案を持ち寄って企画打ち合わせを行った。
- 2) 講座主任講師との各回構成の打ち合わせを、ラジオ講座は9回、テレビ講座は10回にわたって綿密に行った。
- 3) 講座担当講師全員とのテーマ・各回構成の打ち合わせを行った。
- 4) 各回担当講師との各回構成打ち合わせ、教材制作ならびに演出上に関する打ち合わせを行った。

(2) 制作上の工夫、特色について

- 1) ラジオ、テレビ共、局側が講師の意図を十二分に理解・把握するようにする。
- 2) ラジオ講座にあっては、各回の構成と演出の工夫 ― 話しの組み立てと表現、金融機関へのインタビュー等を取り入れ、臨場感のある番組づくりに努めた。また、テーマの性格上、放送日の直前に録音することも配慮した。
- 3) テレビ講座にあっては、テーマの特性に基づいて、各回毎の組み立てと表現、各種教材の制作に力を注ぎ、構成意図と演出意図を生かすように配慮した。

3. 番組の視聴状況と成果（評価、反応）について

昭和62年度の東北大学開放講座は、別添の「テレビ視聴率・ラジオ聴取率」調査票に見られるように、この種の番組としては、高い聴・視聴率を獲得した。ただし、ラジオ講座にあっては、各回毎のテーマによって聴取率にかなりのばらつきがみられた。また、昭和62年度のラジオ講座は、従来実施した講座に比較して聴取率が全体として低下したことが見られた。しかし、再聴取及び公民館等での再利用の希望がいくつか寄せられ、同講座が一定の評価を得たことを示している。

テレビ講座にあっては、別添の視聴率調査書に見られるように、かなり高い視聴率を示している。また、同講座を教育現場で利用したいという希望がいくつか寄せられ、同講座が一定の評価を得たことを示している。

4. 実施上の問題点と今後の課題等について

東北大学開放講座の成功、それは「発酵の時間」をどれだけとりうるかに、かかっている。また、それとならんで、講師のタレント性、プロデューサーならびにディレクターの一層の勉強と素養の蓄積も重大な要因となる。これまで、12年間、同講座の制作・放送を担当してきて、その実感がきわめて強い。また、これとならんで、制作費の制限（12年間殆んど値上げなし）も頭の痛い点である。社内の全力を挙げて制作にあたってきたが、テーマによってはそれにも限界がある点に配慮していただきたい。

また、再利用を前提として同講座の制作・放送に当たることは、著作権処理にかかわる諸問題から、教材の質的低下と数量制限を招くおそれが強い。それでも差し支えないという考え方もあろうが、それは本末転倒であると考えている。

更に、来年度から、東北大学開放講座の教育効果に関する研究を始めるべく、東北大学との間で現在検討を行っている。これは、1回当たり放送時間の長さの変更と回数の変更、MMEの導入の可能性を探る基礎研究となるものであり、実施予算について十分な配慮をいただきたいと考えている。

(2) 番組制作担当者の所見

( テレビ科目 ) 結晶：その生いたちと個性 ー生物から無生物までー

制作担当者： 東北放送テレビ局制作部次長 天 野 弘 三

「結晶：その生いたちと個性」制作雑感

理系講座の番組制作にあたって、大きな問題となる点は、レベルを落さずに平易に、高卒あるいは文科系出身者にも判るような番組を作るという要請である。

この問題の淵源は根深いものがある。

理系の講座の番組で取り上げざるを得ない定量的な証明や数式などの取扱いいかんによっては、受講生、視聴者に決定的な、抜きさしならぬかたちで拒否反応を起こせるからである。

理系講座の成否は、受講生や視聴者の直感的な理解力に収斂されるのではないだろうか？

直感が働くのは、直接見たり触れたりできるもの(マクロなもの)か、あるいは日常出会っていてよく知っている事柄についてである。

たとえば幾何を例にとると、平面図形は比較的考え易いが、立体・3次元、4次元的なものになると全くお手あげになる。と同様に、化学・物理現象の場合も、身の廻りで起っている現象には慣れているので、理論は知らなくてもおおよその見当がつく。

ところが、日常経験の範囲を超えると、常識による直感は不可能になりがちである。たとえば、ミクロな世界がその好例である。

そこで、当番組では以前の経験に照して、必要以上と思われるほどいろいろな模式図を使ったり、写真、映画や実験の映像の助けを借りたり、立体的な模型を用意して、視覚に直感的に訴える方法を試みてみた。この様な教材は、視聴者に親近感を与え、定性的な理解を容易にする可能性をもつと考えられたからである。

その結果は、どうであったろうか。

詰将棋やパズルの解答と同じで、数式による説明も、模型や映像による説明も、説明されればなるほどと思う点で違いはないが、後者を使って説明されるとより全体が自明になると思われる。

この講座は、多数の熱心な受講生をはじめ、多くの視聴者から好評であったが、それはすべて、受講生や視聴者に直感的に理解をさせようとした講師の力量に帰するものであったと考えている。

( ラジオ科目 ) 経済大国日本の虚像と実像

制作担当者： 東北放送ラジオ局制作部参事 杉 崎 祥 子

第1次、第2次オイルショック。このところ急激に進んだ円高。このような条件の下で、かつて、世界歴史上奇跡と言われたわが国の高度経済成長は終りを告げ、産業構造の転換が迫られている。こうした産業・経済の大問題をかかえる中で、国も財政赤字、税制改革、急激に進む高齢化、等々の問

題をかかえ、地域開発の方向も決定できぬまま四全総は迷走を続けた。

この「経済大国日本」の虚像と実像を探ろうというのが、この13回シリーズの狙いであった。

このような、機に即したテーマではあるが、制作者として若干の危惧はあった。それは、東北大学開放講座が、このような狙いをもって「経済」問題と取り組んだのは初めてであったこと。一般に「むずかしい」と受けとられがちな分野だけに、講座の受講生・聴取者として定着している女性層の離脱を恐れたのである。しかし、それは、うれしい誤算であった。受講生総数221名、うち、女性は約37%という数をかぞえた。このことは、時局にマッチしたテーマであったこと。戦後から現在までの日本経済の歩みをふまえながら、産業構造、地域開発といった生活を取りまく大きな問題から、日常の生活実態に至るまでの様々な問題を再検討しようという講座内容に依るものであったと思っている。

演出上の主な工夫としては、「臨場感のある取材音」を、という狙いで極力インタビューの捜入を試みた。地元銀行の海外進出についての副頭取の談話、地元の鉱山・造船会社の解散式に於ける経営者、労働者双方の血を吐く叫び、労働界再編成についての県評の談話、身近なビール会社を例に、消費者ニーズと企業戦略の多様化（産業構造の変化）、四全総に対する熊本県知事の評価と提案、証券会社社員からみたマネーゲームの実態。又、消費者の声として、オイルショック騒動時の反応と行動、住宅費・教育費の高騰と生活実態、年金相談所や職安での高齢者の不安と怒りの声など細かく取材をした。これらの取材音を挿入することで、先生方の話が生きたものとして裏打ちされ、又、聴取者には、より身近な問題として理解度を高め、深めていただけたのではないかと思っている。

ここに、特筆しなければならないことがある。この講座の一回目が放送された翌日、10月19日に、あの株の大暴落が起ったのである。収録済みの回の一部差しかえが行われた。先生曰く「まさに予測通り。この講座のために起ってくれたような出来事だ。」と。激しい株の乱高下の中で最終作業を終了させたのは、勿論、オン・エア前日であったことは言うまでもない。

スクーリングは、このような状況下で行われただけに、毎回時間を超過する盛況ぶりであった。一つの質問に、先生方から視点を変えてのお答えがいただけたことは、大学に於ける研究、教育の成果が地域社会に生きたものとして開放されている姿と受けとめることが出来た。

最後に、大学の開放講座とは趣きを異にしているかも知れないが、「経済」という生臭い問題だけに、聴取者は、銀行や証券会社などの専門家の実利的な分析を求めている面もあったと思う。それらと大学教育に求められているものとの接点を見つける工夫をする事で、より明確な実像を結ばせ得たのではないか……今後に残された課題である。

昭和62年東北大学開放講座テレビ視聴率・ラジオ視聴率

1. テレビ・世帯視聴率

番組名・放送時刻		放送月日				
		10/3(土)	10/10(土)	10/17(土)	10/24(土)	10/31(土)
JNN おはようニュース&スポーツ	6:30～7:00	5.1	6.0	5.0	5.2	3.8
東北大学開放講座	7:00～7:45	2.8	2.3	1.7	2.8	3.0
奥さま広場	7:45～8:00	4.5	3.3	5.2	2.3	5.2

2. テレビ・個人視聴率（10月17日）

番組名	性・年齢別 個人全体	男女(歳)		男性(歳)		
		4～12	13～19	20～34	35～49	50～
JNN おはようニュース&スポーツ	1.9	※	0.4	1.0	0.8	8.5
東北大学開放講座 第3回「結晶とは」	0.8	0.2	※	0.7	0.8	1.1
奥さま広場	2.8	0.7	2.0	1.2	2.9	4.4

3. ラジオ聴取率

性・年齢・職業別 放送日・番組名・放送時刻			個人全体	聴取 エリア 内推 定数 (12～59歳)	男 性	女 性	男性		
							12 ～ 17	18 ～ 24	25 ～ 34
11月29日(日)	ゆかいな英雄たち	18:30～19:00	1.0	30,000 <sup>(人)</sup>	1.5	0.5	※	※	※
	東北大学開放講座 第7回 「岐路に立つ地域開発」	19:00～19:30	0.2	6,000	※	0.5	※	※	※
		19:30～19:45	0.2	6,000	※	0.5	※	※	※
	ソングソングストリート	19:45～20:00	0.2	6,000	0.5	※	※	※	※
12月5日(土)	名曲の小箱	19:55～20:00	0.7	21,000	1.0	0.5	※	※	※
	東北大学開放講座 第8回 「農業はどこへ」	20:00～20:30	1.0	30,000	1.0	1.0	※	※	※
		20:30～20:45	1.2	36,000	1.5	1.0	※	※	2.2
マントバーニ弦は歌う	20:45～21:00	1.0	30,000	1.5	0.5	※	※	2.2	

テレビ講座 「結晶：その生いたちと個性」

ラジオ講座 「経済大国日本の虚像と実像」

11/ 7(土)	11/14(土)	11/21(土)	11/28(土)	12/ 5(土)	12/12(土)	12/19(土)	12/26(土)	13 週 平 均	エリア内平均 視聴世帯数
3.8	4.2	4.2	3.9	3.8	3.9	3.3	2.0	4.2	48,300
2.1	1.7	3.3	2.4	1.6	1.8	2.7	2.2	2.3	26,450
1.8	4.7	4.1	5.5	2.8	2.0	6.7	4.6	4.1	47,150

女 性 (歳)			平均視聴 人数(人)
20~34	35~49	50~	
0.5	1.8	3.2	1.1
0.4	1.6	1.8	1.3
1.1	5.0	5.7	1.5

- (注) 1. TBCテレビの世帯視聴率1.0%当たりのエリア内  
 推定世帯数は11,500世帯。(昭和62年3月末)
2. テレビ個人視聴率の平均視聴人数はビデオ・リサー  
 チ推計。
3. TBCラジオの聴取率1.0%当たりのエリア内推定  
 人数は30,000人。(12~59歳人口、60年国勢調査)

(歳)		女 性 (歳)					男 性			女 性			ドライバー		全 体
35	45	12	18	25	35	45	学 生 ・ 生 徒	給 料 生 活 者	商 自 工 由 業 営 他	学 生 ・ 生 徒	有 職 者	家 無 庭 婦 人 職	全 の ラ ジ オ で 取	カ で の ラ ジ オ 取	カ で の ラ ジ オ 取
44	59	17	24	34	44	59	※	※	13.0	※	※	1.1	1.6	0.5	0.2
※	※	※	※	※	2.2	※	※	※	※	※	1.5	※	0.5	0.5	0.2
※	※	※	※	※	2.2	※	※	※	※	※	1.5	※	0.5	0.5	0.2
2.3	※	※	※	※	※	※	※	0.8	※	※	※	※	0.5	0.5	0.2
4.7	※	※	2.4	※	※	※	※	※	8.7	2.2	※	※	1.1	※	※
4.7	※	※	※	※	2.2	2.5	※	※	8.7	※	1.5	1.1	1.6	0.5	0.2
4.7	※	※	※	※	2.2	2.5	※	0.8	8.7	※	1.5	1.1	2.2	1.1	0.5
4.7	※	※	※	※	※	2.5	※	0.8	8.7	※	※	1.1	1.6	0.5	0.2

講座の概要

<科目の概要>

科目名	中心的なテーマ	科目のねらい	内容・方法
<p>結晶：その生い たちと個性 —生物から 無生物まで— (テレビ)</p>	<p>さまざまな場面で人間の生活とも深いかかわりのある結晶をとりあげて、その本質をさぐる。</p>	<p>結晶についての研究の歴史を踏まえながら、結晶の成長のメカニズムや結晶の形、性質についての理解をめざすとともに、身近な場面での結晶についても検討し、生命活動と結晶とのかかわりなどを考える。</p>	<p>I 第1回、第2回では、結晶についての研究の歴史をふり振り返り、結晶に関する基本的知識を整理する。 第3回から第5回では、身近に存在する結晶を題材にしながら、結晶の基本的性質について考える。 第6回から第11回では、結晶の成長のメカニズムを明らかにするとともに、結晶の形の多様性についても考える。 第12回と第13回では、身近な生命活動の場での結晶に注目するとともに、宇宙の形成などのかかわりで結晶についての最新の研究を紹介する。 II 主任講師が13回をとおして出演し、講座の一貫性が保たれるように配慮する。</p>
<p>経済大国日本の 虚像と実像  (ラジオ)</p>	<p>昨年度は宮城県の近代経済史をテーマにしたが、今回の講座では、現代の日本経済の問題を多面的にとらえなおしてみ</p>	<p>戦後の高度成長から現在までの日本経済の歩みを踏まえながら産業構造、地域開発といった、生活を取りまく大きな問題から日常の生活実態にいたるまでのさまざまな問題を再検討して、「経済大国」日本の実像をさぐる。</p>	<p>第1回の座談会では、戦前の日本経済の特色と、戦後の日本経済の枠組みを大きくとらえ、講座の導入とする。 第2回から第4回では、戦後の日本経済の動きを、高度成長から現在の不況までの流れの中で考える。 第5回から第8回では、産業構造の変化や技術革新の問題を考えると同時に、そうした状況下での労使関係や地域開発、農業の問題を検討する。 第9回から第12回では、日本人の生活実態を経済学的に再検討するとともに、生活に密接にかかわる福祉税制、財テクの問題にもふれる。 第13回の座談会では、今回の講座の内容をまとめ、さらに、今後の日本経済を展望する。</p>

<各科目の構成>

(テレビ科目) 結晶：その生いたちと個性 ー生物から無生物までー

主任講師：理学部 教授 砂川一郎

放送回	放送月日	中心テーマ	担当講師
第1回	10月3日	認識のはじまり	理学部教授 砂川一郎
第2回	10月10日	形から構造へ	〃
第3回	10月17日	結晶とは	〃
第4回	10月24日	結晶：身近な存在	〃
第5回	10月31日	結晶の個性	〃
第6回	11月7日	環境相：結晶のでき方	〃
第7回	11月14日	核：小さな胚芽から臨界核まで	〃
第8回	11月21日	敵と味方の情報：結晶成長の基本	〃
第9回	11月28日	固・液の界面：成長にとって唯一の場所	〃
第10回	12月5日	渦巻成長	〃
第11回	12月12日	千差万別の結晶の形	〃
第12回	12月19日	生命活動と結晶	理学部教授 砂川一郎 金属材料研究所教授 小松啓 水産庁養殖研究所栄養代謝部長 和田浩爾
第13回	12月26日	宇宙と結晶	理学部教授 砂川一郎 〃 助手 塚本勝男 京都大学理学部助手 土山明 北海道大学低温科学研究所助手 香内晃



放送回	放送月日	中 心 テ ー マ	担 当 講 師
第 1 回	10月18日	座談会 どこまで来たか日本経済	経済学部教授 吉 田 震太郎 教養部教授 大 内 秀 明 経済学部教授 徳 永 重 良 " 助教授 平 本 厚
第 2 回	10月25日	高度経済成長の軌跡 -神武景気から石油ショックへ-	教養部教授 大 内 秀 明
第 3 回	11月 1日	1980年代前半の日本経済	経済学部教授 吉 田 震太郎
第 4 回	11月 8日	円高不況に苦しむ日本経済 -カネ持ち日本の光と影-	教養部教授 大 内 秀 明
第 5 回	11月15日	急変する日本の産業構造	経済学部助教授 平 本 厚
第 6 回	11月22日	変貌する労使関係 -日本的労使関係は変わるか?-	経済学部教授 徳 永 重 良
第 7 回	11月29日	岐路に立つ地域開発 -迷走を続けた四全総-	教養部教授 大 内 秀 明
第 8 回	12月 5日	農業はどこへ	経済学部助教授 平 本 厚
第 9 回	12月 6日	経済大国の生活実態 -くらしの量と質を考える-	経済学部教授 徳 永 重 良
第 10 回	12月12日	高齢化社会の福祉	"
第 11 回	12月13日	税制改革問題	経済学部教授 吉 田 震太郎
第 12 回	12月19日	マネー・ゲーム	"
第 13 回	12月20日	座談会 これからの日本経済	経済学部教授 吉 田 震太郎 教養部教授 大 内 秀 明 経済学部教授 徳 永 重 良 " 助教授 平 本 厚

<スクーリング>

回	月 日(曜)	時 間	会 場
開講式 第1回	昭和62年9月26日(土)	ラジオ・テレビ 14:00~16:00	東北大学 経済学部
第2回	昭和62年11月15日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学 文学部 "
第3回	昭和62年12月6日(日)	ラジオ10:30~12:30 テレビ13:30~15:30	東北大学 文学部 "
第4回	昭和62年12月20日(日)	ラジオ10:00~12:00 テレビ10:00~12:00	東北大学 教育学部 東北大学 文学部
閉講式	昭和62年12月20日(日)	ラジオ・テレビ 12:00~12:30	東北大学 教育学部

<再 視 聴>

- 開設場所 東北大学教育学部
- 開設日時

回	月 日	曜 日	時 間	備 考
1	10月17日	土	午後1:00~5:00	テ レ ビ
2	10月24日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
3	10月31日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
4	11月 7日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
5	11月14日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
6	11月21日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
7	11月28日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
8	12月 5日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
9	12月12日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
10	12月19日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ
11	12月26日	土	午後1:00~5:00	ラ ジ オ ・ テ レ ビ